

## ダイズベと病

### 1 病原菌の特徴

ダイズベと病は、葉や莢、種子に発生する病害です。卵菌類の一種(*Peronospora manshurica*)によって発症する病害であり、被害葉の病斑上(葉の裏面、写真1)から分生子(写真2)が風雨によって飛散することにより、伝染します。

また、本菌は、発生残渣や種子上に卵孢子(写真3)を形成し越冬します。この卵孢子が次作の伝染源となります。

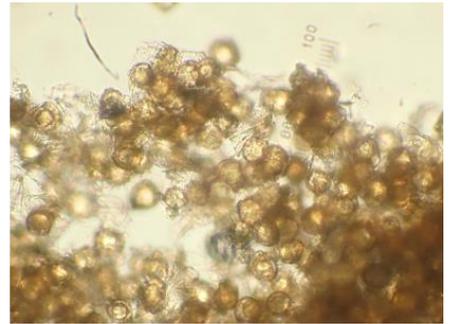
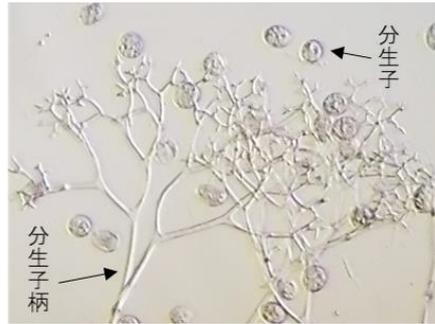


写真1 病斑上(葉の裏面)の菌そう

写真2 病原菌(分生子柄と分生子)

写真3 病原菌(卵孢子)

### 2 被害の様子

- (1) 葉では、初めに淡黄白色で不整形の病斑が生じます。病斑の周囲はにじんだようになり、その後、病斑の中央部が褐色から灰褐色になります。病斑の裏側には、汚白色または淡褐色の綿毛のような菌そうが確認でき、他の病害と区別が可能で(菌そう:菌糸の塊)。(写真4, 5) また、被害が甚だしい場合、葉は萎凋して早期に落葉します。
- (2) 子実では、表面に白色ないし淡褐色の菌そうが付着し、粒の大きさが健全粒と比べて小さくなります。病原菌は種子伝染するため、被害粒をは種すると、生育初期から発病します。



写真4 葉の病斑(表面)



写真5 発病莢と子実

### 3 発生について

- (1) 6～10月に発生し、風雨によって病原菌が飛散するため、特に雨期(6～7, 9月)の発生が多くなります。
- (2) 本病は、種子とほ場内の残渣が一次伝染源となります。発病種子や感染茎葉の残渣において病原菌が越冬し、次作の発生につながります。
- (3) 葉の病斑上に生じた分生子が、風雨によって飛散するなど二次伝染が起こり、まん延します。
- (4) 本菌は多湿条件であるほど孢子(分生子)の形成および発芽が促進されるため、降雨や曇天が多いと発病が多くなります。また過繁茂となり、風通しが悪いほ場においても発生が助長されます。

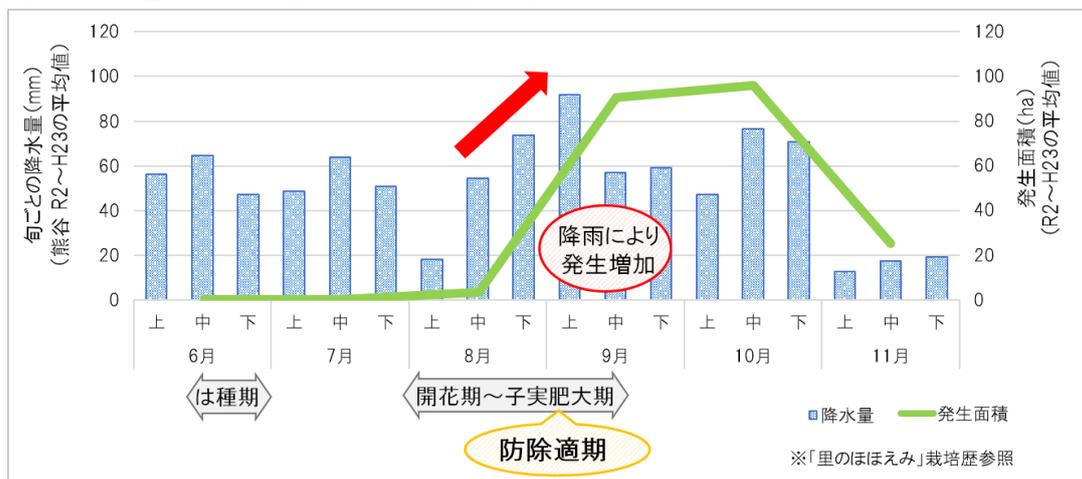


図1 埼玉県におけるダイズべと病の発生消長と降水量（熊谷アメダスデータ）

### 4 防除時期と防除方法

- (1) 耕種的防除
  - ア 被害茎葉が病原菌の越冬場所となるため、ほ場に残さず、焼却など適切に処分してください。多発したほ場では連作を避けましょう。
  - イ 本病原菌は種子伝染するため、健全株から採種した種子を使用しましょう。
  - ウ 過繁茂で風通しが悪いと発病しやすくなります。密植を避けるとともに、適期は種に努めてください。
  - エ 品種によってべと病抵抗性が異なるため、抵抗性品種を作付けることによって、発病を抑えることができます。
- (2) 薬剤防除  
開花10日前～子実肥大期が防除適期とされています。散布は葉裏に薬剤がかかるよう、丁寧に行い、薬剤耐性菌の発生を抑制するために、作用機構の異なる薬剤でローテーション散布を行ってください。

#### 農薬を使用する場合は、

- ラベルの記載内容を確認して、使用基準(適用作物、使用時期等)を必ず守って使用しましょう。
- 適切な薬剤を選択し、病害虫が抵抗性を獲得しないように、同一作用機構薬剤の連続使用を避けてください。
- 住宅地や近接作物等へ飛散しないように必要な対策を実施するように努め、周囲に十分な配慮をしましょう。

■ 発行 令和4年3月 埼玉県病害虫防除所

■ 問合せ先

埼玉県病害虫防除所 TEL048-539-0661

埼玉県農業技術研究センター病害虫研究担当 TEL048-536-0409



©埼玉県 2005

彩の国埼玉県